大会テーマ研究会の記録

「アーカイブズの新時代へ－理想と現実のはざまで－」

大会企画趣旨説明

大会企画委員会

一昨年の山口で開催された第30回大会では、これまでの全史料協の歩みを振り返り、ひとつの区切りとした。昨年からは、それを踏まえて、「アーカイブズの新時代へ」という3年間通してのテーマを掲げ、全史料協としてどのように次のステップを踏み出すかを議論することにした。

その第1回の昨年は、結論を出すことよりも資料保存の現場が今どうなっているのかということを共通認識とし、現場からの提言を共有することを課題とした。そこでは、電子文書の世界－その可能性と問題－、災害対応、市町村合併への対応、指定管理者制度導入の現実、専門職養成といった、多様な課題を取り上げ、それぞれの現場の実情や問題点が報告された。いずれの問題も重いもので、すぐに答えがでるものではない。しかし、文書館が直面している現実の厳しさや問題意識を共有化するという目的は十分に果たせたといえよう。

アーカイブズの世界は、いまや、文書館・公文書館などといった施設に働く者や、そこの資料を利用して研究する者だけの世界ではなくなっている。アーカイブズはより広い社会で新たな視点から認識され、その結果、アーカイブズの意義や役割について新たな要求が生じ、それへの対応が急務となっている。

例えば市町村合併や指定管理者制度など外部からの政策要請として直面する課題に、アーカイブズはどのように対応すべきなのかといった問題がある。このうち特に市町村合併に関しては、全史料協としても平成13年以来たびたび関係各方面への善処の要請を行ない、国立公文書館からも総務省・総務大臣への要請がなされていることは、周知の通りである。しかしさらに、その働きかけが十分であったかどうか、合併時の配慮は今後も生き続けるのかどうか、われわれはフォローする責務があろう。

指定管理者制度については、まだわれわれの意識にのぼり始めたばかりである。制度について正しく理解し、資料保存活用という事業の性格との関係を議論することが求められている。

また電子文書の普及は、それ自体はアーカイブズとは無関係なところで起こりながら、結果としてその影響を甚大に受けるという状況も発生している。長期保存という視点で見たときの電子文書の脆弱性に対し、アーカイブズは何をすべきか。電子文書を生み出す立場の人たちと連携をとることは不可欠である。

一方で、世の中の動きはわれわれ関係者にとって、マイナス要因ばかりではない。よく知られているように、NHKアーカイブスというテレビ番組ができたおかげで、アーカイブズという言葉は一気に広まった。また、この6月には「公文書等の適切な管理保存及び利用名関する内閣府の懇談会」が官房長官に「中間段階における集中管理及び電子媒体による管理・移管・保存に関する報告書」を提出し

ている。さらに最近の動きとしては、総合研究開発機構の委託による公文書管理法研究会の活動から、法整備のための論点整理がまとめられた。このように、アーカイブズをとりまく世界にとって心強い援軍もまた、世の中に生まれてきている。

こうした中、全史料協には、自らの足元をきちんと固め、同時に世の中からの要請も受け止め、両者を見据えて進んでいく努力と意識が求められる。

3年間通してのテーマの中で2年目となる今年は、ホップ・ステップ・ジャンプでいえば、ステップの年にあたる。そのステップ、すなわち着実に一歩を進めるために、まずは一般の市民にとって最も身近な自治体のアーカイブズについて考えることを中心にすえた。そこでは、都道府県のアーカイブズの整備にとどまらず、より生活に密着した市町村のアーカイブズを拡充するとともに、都道府県との連携を築いて、全体として日本の資料保存活用体制を充実させることが重要である。そのような考えから、まずは全体会でこの課題をとりあげ、議論の端緒とすることとした。

まず、最初の報告は、昨年9月に設立された岡山県立記録資料館にお願いする。同館が県のアーカイブズを形作る過程は、まさに「いま」の現実とあるべき理想とのはざまを実感するものだったといえる。行財政改革や電子文書の普及といった周辺の現実に直面しながら、どのように県庁内、県内市町村あるいは中国四国という広がりの中で各方面と連携し、アーカイブズを確立しようとしているか、報告をいただく。

次に、地元岡山県での市町村合併における公文書保存の取り組み事例として、近隣町との合併を経て公文書館建設にむけて動き始めた倉敷市から、報告をいただく。県からの報告と併せて考えることで、県との連携やその構想の中での市の実情などが、立体的に見えてくるだろう。

分科会では、より具体的な話題に絞り込み、参加者全員で率直に議論したい。

第一分科会では、市町村合併に伴う公文書保存の問題に積極的に取り組み成果を挙げた山口県の事例を元に議論する。山口県では、個々の自治体だけではなく、県の文書館が牽引役となってこの課題に対応した。市町村合併が一段落したいま、その具体的な取り組みに関する報告をしていただき、議論する。

第二分科会では、昨今、国立大学を中心に設置が進んでいる、組織文書の保存を重視した大学アーカイブズの活動を元に議論する。大学にとっての公文書館という方向性を探る中で、大学では現在アーカイブズの本質に関する議論が盛んになってきている。自治体とは異なるアーカイブズの報告を聞くことで、アーカイブズのあるべき姿を考えたい。

第三分科会では、アーカイブズの理解を広げ、アーカイブズのもつ豊かな情報をよりいっそう活用してもらうために不可欠な、情報発信について議論する。早くから、自館の概要情報を提供するのみにとどまらず、地域情報の発信や古文書講座等もHPを通じておこなっている新潟県立文書館の現場から、具体的な報告をいただき、今後の可能性をさぐりたい。

最後にふたたび全参加者が集まり、もう一度今年のテーマ「理想と現実のはざまで」を意識しつつ、次につなげる議論を深めたい。

アーカイブズの理想は、現実とかけ離れたところにあるのではない。また、唯一の理想形があるのでもない。アーカイブズを設置する組織の性格、現実、世の中の動き、それらが常に動的に作用して、アーカイブズの理想もまた変化し続ける。現実をふまえたうえでそれを超える

理想的なアーカイブズ像を描き、それを目指してまた活動することで、理想と現実のはざまを埋め、同時にアーカイブズの意義についての理解を広めることになるだろう。

年に一度の大会の場で具体的に答えが出せる課題は、それほど多くはない。しかし、職場に戻ったときに支えとなる指針のようなものを共有するのが、大会で顔を合わせて議論する意義であろう。

昨年は助走しながら現実を直視した。今年は顔をあげてゴールとの距離を測る。来年、これから先のアーカイブズの姿がゴールに見えてくるように、今年の大会期間中に充実した議論を蓄積したい。